訳者あとがき

ヒトラー政権下のドイツで自らの命を賭けてユダヤ人を匿った人々がいた。

この書の著者は、そんな勇気ある人々の連携によって助けられ、生き残ることができた。一九九九年に出版されたこの書の原題は“Nicht alle waren Mörder——Eine Kindheit in Berlin”（「みんなが殺人者ではなかった——ベルリンの少年時代」）という。このタイトルは、一見ドイツ人の自己弁護であるようにみえる。しかし著者はユダヤ人である。地下生活が始まった一九四三年当時、十一歳だった少年は、半世紀以上を経て自らの体験を公表した。ここには爆撃下に暮らすベルリン庶民の日常生活と、ソ連軍のベルリン進攻によって混乱する戦争末期の市民の様子が具体的に描かれている。著者がこの書を記すきっかけとなったのは、ロス・アンジェルスから来た作家ラウラ・ワコー（Laura Waco）とのテレビでの対談だった。この作家の両親は奇跡的にアウシュヴィッツを生き延びたが、戦後、家庭では決してあの時代のことを話題にしなかったそうである。この著者ミヒャエル・デーゲンもまた、戦後、母親にあの時代のことは忘れるようにと約束させられ、彼もいつの間にかそれを自分の意識の外に置いていた。このトーク・ショーのあと、彼はその話を本にしないかと出版社から誘いを受けた。しかし彼は躊躇した。当時のことを正確に思い出せるか、そもそも書き続けられるか。だが書き始めてみると、驚くほど鮮明に当時のことが蘇ったという。はらはらどきどきの緊張が次々に展開するストーリーは、あたかもスリラーのようである。母親と共に少年は、ドイツ人の友人たち

の手引きで隠れ家を点々とする。あのヒトラーの時代に、本当にこんな市民的勇気（Zivilcourage）をもった人々がいたのかと思うと、それは救いである。助けてくれた人々の中には、ナチ党員も、親衛隊員もいた。また金銭と引き換えに匿ったり、打算からだったり、他に下心があったり、犯罪と関わっている者もいた。多くの場合、加害者と被害者の区別がつけがたかった。この書には、白黒併せ持つさまざまな人々が登場している。

一九四一年秋、ドイツにおいてダビデの星マークをつけることがユダヤ人に強制され、国外移住が禁じられたとき、ドイツにはまだ一七万人のユダヤ人とニュルンベルク法によってユダヤ人とみなされた人々が住んでいた。いまや国外脱出への道を封じられたユダヤ人にとって、生き残る道は唯一地下に潜るしかなかった。移送命令を逃れて、地下に潜ったユダヤ人は一万人以上いた。彼らは一般にUボートと呼ばれた。地下生活とは、非合法に生きることを意味する。さまざまなやり方でユダヤ人を助けた人々は、現在までで二五〇〇人以上が確認されている。

ミヒャエル・デーゲンと彼の母アンナは、ベルリンで生き残ることができた。大都市での生活は、小さな町や村より潜行するには都合がよかった。ベルリンにはユダヤ人救援組織もあった。地下に潜ったユダヤ人の半数はベルリンとその周辺に住むことになった。そのうち生き残ったのは一五〇〇人といわれる。ユダヤ人の救援に参与した人の数は、一般に考えられているよりは多かったようである。また一人を救うのに多くの人が関与しているようだ。生き残るには、当然のことながらまずユダヤ人自身の主体的な勇気と生き残りへの執念が必要だった。それを可能にするには、どうしてもユダヤ人や非ユダヤ人の助けが必要であった。匿ってくれる人を見つけられるか否かが当時のユダヤ人の生死を分けた。身分証明書も食料配給キップも持たず、市民生活を送るのに必要な証明書類も持たずに生

きることはほとんど不可能であろう。周りには密告者やナチのスパイ、Greifer（摘発屋）といわれるユダヤ人で、自分の生き残りのためにゲシュタポに協力して同胞を探し出す者もいた。

紙一重の危険な状況の中を、危機一髪のところで助かるデーゲン親子のこのスリリングな話は出来すぎていると思う人もいるだろう。しかし彼らは事実生き残ることができた。好運な偶然の積み重ねと勇気ある人々の機転によってである。爆弾が投下されているとき、人気のないベルリンの中心街クーダムにぽつんと立つ二人の姿は印象的である。母は「大丈夫、私たちには何にも起こらないわ。私たち生き延びるんだわ」と息子に確信させ、彼はその通りそう信じる。

デーゲン親子を助けてくれた人々は、それぞれに個性的である。著者の父親をザクセンハウゼン収容所から解放する手助けをしてくれたのはナチ親衛隊員である。そのために彼はのちに命を落とすことになる。父は解放されてまもなく病院で死ぬ。ユダヤ人の営業が禁じられたあと、デーゲン氏の店を継いだドイツ人女性ローナは、彼の死後デーゲン母子を匿う手筈を整えてくれる。彼女はまず、亡命ロシア人貴族の女性ルドミラの家を斡旋してくれる。ルドミラはナチ幹部とも交流がある。ローナの夫は犯罪者で、闇の組織とも関わっている。売春宿のおかみは金稼ぎのために母子に寝どころを提供し、共産主義者ホッツェ夫妻は反ナチズムの立場から助けてくれる。ホッツェ家に同居する妹のマルトヒェンは、当然のこととして二人を匿い、適時に機転をきかせて逃がしてくれる。ユダヤ人を助けるためにナチ党員となったエルナ・ニーホフは、ナチ国民福祉事業団で働いていて、彼らを助けたために命を落とす。チェコ人収容所で賄い婦として働く彼女の妹ケーテ・ニーホフは、ナチズムを自然の猛威として耐え、二人に普通の市民の生活を提供してくれた。アウシュヴィッツへのユダヤ人輸送列車の機関士レートリヒは、加害者としての罪の意識に苛まれるが、二人に救いの手を貸すことが

できて精神的に救われる。しかし息子の死は、彼を完全に打ちのめした。最後に彼らは、ユダヤ人のソ連軍将校に保護される。検問や隣人の監視、ゲシュタポの追跡におびえながらも、デーゲン母子はいつも助けてくれる人々を見出すことができた。そうした人々に著者は感謝の辞を捧げている。

俳優ミヒャエル・デーゲンについて簡単に触れておこう。彼は一九三二年、旧東独のケムニッツで生まれた。母は父を強制収容所から助け出すことに成功するが、父は収容所での虐待がもとで死ぬ。四歳年上の兄はパレスチナへの脱出に成功した。戦後まもなく、著者は東ベルリンの俳優学校で学び、才能を認められ、ブレヒトの「ベルリーナー・アンサンブル」のメンバーとなる。その後、イングマル・ベルクマン、ゲオルク・タボリ、ペーター・ツァデックなど著名な監督のもとで演じ、自ら監督も務めた。一九七八年にはテレビ映画トーマス・マンの「ブッデンブローク家の人々」に出演し、テレビ界でも名を知られるようになった。テレビ映画ではヒトラーの役を演じたこともある。テレビの推理ものの人気番組や、数々のホームドラマにも出演し、幅広い層の人気を得ている。この書は来春映画化が予定され、最近は小説家としても活躍している。

八〇年代半ばにデーゲンは、ヒトラー護衛隊の公的な集会に抗議して、ハンブルクの家を壊され、殺害の脅迫を受け、一時舞台から退いた。最近のネット新聞によると、多くの著名なユダヤ人が差出人名入りの脅迫状を受けとっているようである。彼もその一人で、「いままた追われている」という危機感を持っているという。その背景には、パレスチナに対するイスラエルの強硬な態度など、いささか妥協を欠いたユダヤ人のやり方に怒りを持つ人々もいるだろう。ベルリンのブランデンブルク門近くの広大な一等地に完成したホロコースト記念碑も複雑な感情を人々に呼び起こすだろう。かつて

の被害者ユダヤ人には、寛容こそが未来のすべての問題解決の確かな糸口であることを理解してもらいたいと私は願っている。ただ反イスラエルを隠れ蓑にしたネオナチの台頭は断じて許されるものではない。近年ヨーロッパではネオナチに近い保守政党が力を得、世界が総じて保守化、右傾化しているように思われる。わが国においても首相の靖国参拝問題、憲法改正問題など例外ではない。再び戦争を繰り返さないために、口先だけでなく過去の歴史を正しく認識し、真実を直視する勇気を我々日本人も持つべきだろう。

最後に、慣用句や俗語、方言などが続出するこの書の翻訳のために、度重なる質問にいつも快く応じてくださった友人で東海大学講師スザンネ・内田先生、フンボルト大学日本語科講師高島市子先生とベルリン子で戦争の時代のことに詳しいギッチュマンさんご夫妻に心から感謝いたします。これらの方々のご協力がなかったなら、この訳書は完成を見なかったでしょう。またこの書の出版のためにご努力をくださった石田百合さんと影書房の皆様に御礼申し上げます。

二〇〇五年一〇月

訳者